別紙２

審査の結果の要旨

論文題名　帝政ロシアのムスリム社会と国家：
ヴォルガ・ウラル地域　1905-1917

氏名　長縄　宣博

ロシア帝国は、ロシア正教を優位に、様々な宗教に属する人々が、各々の言葉で神とツァーリに祈りを捧げるというコスモロジーを長期に渡って持続させていた。その仕組みを考察することは、異なる宗教の共存という今日的な課題にも、十分な思考の糧となる。とりわけヴォルガ中流域からウラル山脈南部にかけての地域は、ロシア正教徒が大多数を占める多民族空間であるが、そこにムスリムとして生きてきた人々の歴史は、我々に多くの示唆を与えてくれる。しかしながら、国家制度とムスリム社会との豊かな相互関係の歴史は、90 年代初頭まで、西側だけでなくソ連の歴史学の中でも見落とされてきた。なぜなら歴史学の関心は専ら、この地域のムスリムが既存の体制からの解放を目指す運動にあったからである。

長縄氏の論文は、ロシアの帝政最後の十年を扱いながら、政府にもムスリム社会にも一つの新しい時代だったことを明らかにしようとする。政府は、革命によって揺さぶられた帝国の一体性の修復を至上命題とする一方、革命が引き出した「ムスリム市民」への対応が迫られた。ムスリム社会は、猜疑心に満ちた政府の統制が強化されたにもかかわらず、1905 年革命以降、集会や定期刊行物を通じて明確化し、共有するようになった自らの社会の諸問題を既存の制度を駆使して解決しようとしたというのである。つまり、政府の統合志向と諸民族の自治志向との矛盾が体制の危機を醸成したという今日まで広く受容されている時代観とは異なり、帝政最後の十年は、ムスリム社会と国家との交渉がこれまでになく深化した時代だった。その軌跡を詳細に跡付けることが、この博士論文の課題だというので

ある。

多民族・多宗教性に注目する今日のロシア帝国論に通底するのは、国家が与える枠組みがどのように人々の意識や行動を規定し、その人々の生み出す新たな事態に国家がどのように対応したのかという問いである。本論文は、帝国の制度とムスリム社会の論理が織り成す相互関係と、それが不可避的に抱え込まざるをえなかった困難を分析する。基本となる史料は、テュルク語で書かれたムスリムの新聞･雑誌と主にロシア語で作成された公文書である。定期刊行物は 1905 年以降、ムスリム社会の諸問題を集約して議論を喚起し、世論を形成する上で極めて重要な役割を果たした。よってそこからは、国家との相互関係の場を探し、それと密接に関連している機関や制度を抽出することができる。そして、これらの機関や制度に関わる政策決定過程や実務を再現するために、サンクトペテルブルグはじめ、カザン、ウファ、オレンブルグの文書館資料が不可欠なのである。本論文は、全 6 章と補論から構成され、それらは第一部の宗教行政、第二部の地方自治、第三部の戦争という大きなテーマに分けられる。

第一部の第 1 章でヴォルガ・ウラル地域のムスリム行政の要だったオレンブルグ宗務協議会の改革論、第 2 章で金曜マスジドを中心とする共同体であるマハッラの生活、第 3 章でムスリム聖職者の任免を行なっていた県庁の実務を取り上げている。

第二部は、地方自治体とムスリム社会との相互関係を扱う。ヴォルガ・ウラル地域のムスリムは、アレクサンドル二世の大改革がもたらした市会とゼムストヴォ両方の恩恵を受けた点に際立った特徴があった。第 4 章では、1905 年革命以降、カザン市会を中心に大きな議論を巻き起こした、商業地区の休日問題を取り上げている。第 5 章では、1913-16 年にムスリムの新聞・雑誌上で展開された、「マクタブか、公立学校か」という論争に着目し、義務教育の導入という国家事業をめぐって、とくに南ウラルでゼムストヴォとムスリム社会との交渉が進展した経緯を分析する。

第三部は、帝政最後の十年として、日露戦争にはじまり第一次大戦に終わる戦争の時代を扱っている。第 6 章と補論では、ムスリムが戦争遂行に統合されていた仕組みを論じる。具体的には第 6 章で、軍内部のムスリムの信仰生活を保障する制度としての従軍ムッラーと、銃後の信仰生活を維持する制度としてのムスリム聖職者の徴兵免除を取り上げ、補論でムスリムによる戦時の救援事業の組織化について考察した。

本論文は、国民国家建設の道具になりうる制度とムスリム社会との相関も、考察の射程に収めた。第 1 章で、司法制度改革とシャリーアの運用との関係に言及し、第 5 章で義務

教育の導入、第 6 章で国民皆兵制を扱ったからである。近年、帝政ロシアは、国家建設には成功したが、多民族構成の国民を作り出すことには失敗したという考えが定着しつつある。ロシア帝国の近代化は、統治制度を画一化・標準化すると同時に、多種多様な差異を強化し、新たな差異さえ作り出したからである。これに対して本論文は、二つの近代化戦略の因果関係とバランスに注目する。そして、多様な差異の制度化も実は、重要な統治戦略として残ることを重視する。なぜなら、まさにこの側面でこそ、国家とムスリムとの交渉が深化し、それによって既存の制度が強化されることさえあったからである。確かに、ヴォルガ・ウラル地域のムスリムも、政府の国民形成構想の対象となった。しかし、彼らはまさにムスリムとして生きることによってすでに、帝国統合のコスモロジーの不可分の一角を成していたのである。

以上のような点を豊富な史料収集に基づく緻密な実証と理論構成で明らかにした本論分は審査委員全員によって高く評価された。イスラーム研究とロシア研究の境界領域に正面から挑戦した意欲と、国際学界でも例のない緻密なタタール史とロシア史の実証的な横断研究は申し分ないものであり、６名の審査委員からは否定や疑問に類する発言はほとんど出されなかった。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。